

特集 さまざまな課題に対応するために

二極化に対応したい

NEW CROWN編集委員会

はじめに

「二極化に対応する」とは、目標を2つ作ることでない。ねらいとすることは、さまざまな生徒が混在する教室において、すべての生徒が、「授業が楽しい」と満足し、それぞれが力を伸ばせるような授業の組み立てを考えることである。

この点について、新しくなった28NCの(特に24NCで戸惑いの声が多く聞かれた)USE Readの扱い方と、USE Writeの具体的な指導例を提案させていただきたい。

USE Read の指導のポイント

昔から「題材のNEW CROWN」と呼ばれているとおり、USE Readの本文には、surprisingやinterestingな情報があり魅力的である。ここでは「読む」ことに集中させ、題材の良さを味わい、内容のある英文を読むことのおもしろさや意義を伝えられるように支援したい。英文を読み、それが理解できたときの感動や、わき上がる題材への興味は、生徒自らが「読みたい」と思う前提となる。

導入におけるオーラルイントロダクションは、本文の内容を押し並べて口頭で解説するのではなく、生徒が思わずその本文を読みたくするような話をしたい。例えば、Book 2 Lesson 5のUluruであれば、インターネットや資料を利用して得た、Uluruの画像や動画、情報をうまく使い、ながら旅行会社の営業マンのような気持ちで、生徒に「Uluruについてもっと知りたい」「本物を見たい」と思わせるように語りかけたい。

同時に、スキーマ(その題材に関する背景知識)を活性化させ、できるだけ本文中で使用されている

語彙を使用することで、英文を読む負担を軽くし、生徒が自分の力で読み進められるように配慮する。

また、リーディングタスクとして投げかける発問も大切である。内容理解を問うもの、YesかNoで答えるものだけでなく、魅力的な発問を考えたい。「ウルルで仕事十分にできない職業が2つある。それは何と何か」「アナング族が現在困っていることがある。それはどんなことだろうか」など、ある程度本文を参考にしながらも、題材の中に入り込み、あれこれ思いをめぐらせて考えたり、友達と相談したりしながら、それぞれの発想で答えを見つけるような問題を与えてから、読ませているのはどうか。

読書は文字から風景を想像し、登場人物の心の動きを読み取る。教科書本文も同じように扱うことができる、その題材は誰にとっても魅力的になる。

英文が読めない生徒には、ある程度個別の支援が必要となる。例えば、今回の改訂から紙面の幅が少し広くなり、両脇の新語に日本語がついた。これを利用させるのもよいし、単語でのつまずきが原因であれば、教科書本文をセンスグループで分け、既習でも難しい単語の上に意味をルビで書いてあるプリント(下図)を用意することもできる。

English Series 2 Lesson 5 Uluru USE Read

Uluru

※スラッシュ(/)ごとに読んで意味を理解しましょう。

Ayers Rock is a famous place / in Australia.

It looks like a mountain, / but it is actually a very big rock.

It changes its color / during the day.

Sometimes it looks red / and sometimes it looks purple.

Book 2 Lesson 5 USE Read のプリント

大切なことは、自力で読むという小さな成功体験を重ねること、さらに生徒に英文を自力で読むコツや自分の課題(語彙力であったり、英語の語順やセンスグループの理解であったりする)に気づかせて、さらに伸ばしていくことである。

具体的なUSE Write の指導例

右はBook 2 Lesson 5のUSE Write

「好きな国についてエッセイを書こう」である。3段階で順を追って丁寧に指導手順が示されている。

1でモデルの提示がある。目標となるモデルを単に見せるだけでなく、文章の構造を分析して、「何を」「どの程度」書けばよいのか、どの生徒にも理解できるようにになっている。

2では、「クラスやグループで協力して、「好きな国」について、エッセイを書く練習をしよう」という段階を踏むようになっている。いきなり個人で取り組むのではなく、グループで取り組むことにより、どの生徒も一通りの流れを学習することができるとともに、スローラーナーも、アイディアや着想の面で参加できる協働学習の強みをうまく活かすことができる。

そして3で、それぞれの発想で自由に取り組めるようになっている。スローラーナーにはモデル文やグループで作った文をできる限り参考にさせながら、自分で考えた文を少しずつ追加させる。ファストラーナーにはそれまでに学んだ言語材料を駆使し、必要に応じて辞書等を活用させながら、モデルを越える文章を自由に書かせるとよい。

実は、教師が中心となって一斉に教えるスタイルよりも、むしろ、活用を図る授業、自己表現や生徒が自由に考える生徒中心の授業スタイルの方が、学力の二極化には対応しやすい。生徒は自分の習熟にあった取り組みができ、教師はそれをつぶさに観察し、把握しながら、それぞれ個別に次の課題を示し

USE—Write

好きな国についてエッセイを書こう

1 先生がエッセイを使っています。

2 先生を模倣して、自分の好きな国について、エッセイを書こう。

3 先生を模倣して、自分の好きな国について、エッセイを書こう。

オーストラリア

Opening

Body

Closing

好きな国

その国を好きな国

挨拶

• Australia

• Uluru / beautiful

• feel relaxed

• koala / cute

• visit Australia

Australia

Tsunaka Kumi

Midori Junior High School

I like Australia very much. I will tell you two reasons. First, Uluru is beautiful. I feel relaxed when I look at it. Second, Australia has koalas. They look cute. I hope that I will visit Australia soon.

エッセイに使う(タイトル)「書き」の練習は、このようにしてやる。

2 クラスやグループで協力して、「好きな国」について、エッセイを書く練習をしよう。

Opening

Body

Closing

好きな国

その国を好きな国

挨拶

3 先生を模倣して、自分の好きな国について、エッセイを書こう。

Opening

Body

Closing

好きな国

その国を好きな国

挨拶

たり、つまずきを支援したりすることが可能になるからである。あわせて、2の協働学習のアプローチは、非常に有効な指導法の1つであるので、この課題だけではなく、他のさまざまな課題や指導にもぜひ積極的に応用していただきたい。

おわりに

紙面の都合でここまでしかご紹介できないが、まとめると新しくなった教科書では、以下の3つのポイントが押さえられ、より二極化に対応しやすい生徒中心の授業を行いやすくなっている。

- ① 生徒が主体的に取り組める課題の設定
 - ② 協働学習(ペア・グループ学習)の活用
 - ③ 学力差に応じた具体的なヒントの提示
- 生徒の声に耳を傾ければ、英語が苦手な生徒も得意な生徒も、英語の先生に期待しているのは、「もっと英語が上手になるように・わかるように教えて欲しい」ということだとわかる。その思いの強さは決して生徒の習熟度で計れるものではない。英語が苦手な生徒であっても、英語が人並み以上にできる生徒であっても、それぞれの生徒が目一杯、自分が授かっている力を伸ばそうと夢中で英語の学習に取り組むようにしていくこと、さらに英語を学ぶ喜びや価値を習熟に関係なく、すべての生徒に伝えることが出来るのも、また他ならぬ英語教師であることを忘れずにいたい。